

## 一、私の彗星日記 (My Comet Diary)

生涯において、七十六年を周期とするハレー彗星を二度観ることの出来たのは、正に上よりの御恵みによるもので、天寿の賜であります。

拙著『あの日あの時』で、自分の出生を次のように述べました。

「母方の祖父の話によれば、生れたばかりの私は、掌てのひらに軽々と乗る、極めてひ弱な赤児だったという。でも、その後、母がある坊さんに、私の運勢を占ってもらったら、かなりの長命だろうと言われたそうです。

これは私が小学校に通うようになってから聞いた話です」。

「君はよい星の下に生れたね」とか、「僕は悪い星の下に生れたもんだ」などという。人間の運命が、星と何らかの関係があるように云われるのは東西軌を一にしているようである。

ギリシアの昔から、占星術が盛に行われ、人間の運命が星によって左右されると

考え、人間の悲しみや喜びが文学の基調となり、アイスキュロスや、ソフォクレスの悲劇となり、アリストファネスの喜劇となった。

おなかを痛めたわが子の出生は、その生母にしてみれば重大事で、「この子はひ弱だ」と云われて、わざわざ名僧智識を訪ねて、お伺いをたてるのである。全く有難い親心というべきである。この母親は、わが子の不幸を星のせいだと諦めたであろうか。そもそも、天地を創造された神様が、空の星をおつくりになり、これを悪者に仕立て、「よし」と御仰せになる筈がない。してみると、「星のせいだ。ハレーは髪の毛の長い空飛ぶ魔女だ」などという悪口雑言はもつての外である。

老生は、これまでハレー彗星について、随分誤解もし、御恨み申したことがありましたが、この日記を書くに当り、自分のこれまでの非礼をお詫びし、「ハレーさんは大警告者です」と訂正させていただきます。

人間は、個人の場合には勿論、国民としても、自分の蒔いた種は自分の手で刈らねばならぬ。

世界の歴史を見ても、その興亡は因果応報の理に基いている。

そこで、私の日記は、先ずわが国史を回顧して、古来の争乱や天変地異を、徒に彗星のせいにしてきた愚かさを反省し度い。

### 歌書よりも軍書に悲し吉野山

確か明治四十年に、学制が改革され、高二から逆戻りして、高一となり、吉田小学校の古巣（横浜市中区羽衣町所在、現吉田中学校のところ）に戻って、関根源三郎先生のクラスに編入された時であった。国定教科書で、標記の国文を読んだ時の記憶がまざまざと残っている。

これは吉野山の叙景に始まり、南北朝の争いと、楠公父子の忠節を述べたもので、多感な少年として涙なしには読めない記事でした。国史についての知識に乏しい自分はまだ訳もなく悲しかったことを覚えている。

今日、わが国史を繙いて見ると、王権確立には常に骨肉相争う暗い歴史が繰り返されている。これは、何れの国においても稀らしくはない。そもそも、神様が人間をお造りになった時以来のことである。

標題の「歌書よりも軍書に悲し吉野山」は芭蕉の弟子で、美濃の人、各務支考の俳句である。

吉野山は人も知る桜の名所で、『新古今集』に、「み吉野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は来にけり」が載っているので知られているが、『新古今集』巻頭のこの歌は立春のよろこびを詠んだものである。この歌におけるように吉野の印象は極めて明るいものであるが、藤井竹外の漢詩、「古陵松柏吼ニ天颿一 山寺尋レ春春寂寥 眉雪老僧時輟レ帚 落花深処説ニ南朝一」を読んだ時、吉野の桜という明るさ美しさは何処にも見当らず、この古陵に眠りたもう後醍醐天皇の御胸中をお察し申し上げて、感無量なものがある。

芭蕉翁が吉野紀行で、「よし野にて桜見せうぞ檜木笠」と詠んだ。この句には旅の面白さが躍動している。こうした悲喜対照の感懐が古来の文学であり、ギリシアのアリストテレスの昔から神の造り給うた人間の演ずる悲喜劇が神話となり、伝説となっている。

これは人間の運命が星と深い関係にあるとされた占星術の影響であろう。然し人

間が、自分達の運命を左右する星の正体を把まんと研究を重ねた結果、天文学になつたことは自然の成行きで、わが国の歴史においても、古来、彗星の出現に、われわれの運命にかかわりがあるものとして古人は不安を抱きながら、夜空を仰ぎ見たことであろう。

天武天皇十二年、『日本書紀』に、「秋の七月二十三日、彗星が西北の空に現われた。

長さ一丈あまりである」と記されている。

天武天皇は、天文学、占星学に関心が深く、六七五年（天武天皇三年一月五日）に、はじめて占星台を建てられたことも『日本書紀』に記されている。当時、都は飛鳥に置かれていたが、その場所は何処であったか定かではない。

この文化的に安定を見るに至った天武天皇の御代を迎えるまでには、幾多の波乱があった。歴史を溯って、大化の改新における聖徳太子の政治、「和を以て貴し」とした仏教興隆の時代も表面的には安定の時期であったが、皇族間の争いは依然として絶えなかった。